Osaka University Knowledge Archive

Title	蘇東坡とその書
Author(s)	中田, 勇次郎
Citation	懐徳. 1957, 28, p. 3-14
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/90308
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

論叢

蘇東坡とその書

中田勇次郎

中國においては文學と書というものは、かならずしも平行して發達してはいない。たとえば、書のうえでは東晉が一つの高い峯をなしているが、六朝の文學といえばやはり齊梁がもつともはなやかな時代であるというべきであろうし、初唐には歐陽詢、虞世南という大家があらわれて書のうえではまた一つの高い峯をなしているが、唐の文學といえばこれもやはり盛唐の李白、杜甫を取るべきであろう。このような歴史のうえのはなしばかりではなく、個人的にいつても、むかしから文學で名を知られた人はかならずしも書が上手ではないというのがためしになつている。ところが、ここでとりあげようとする蘇東坡は、中國におけるもつともすぐれた文學者の一人として知られている人物であり、その作品はひとり中國のみならず、わが國にも古くから愛誦されている。しかし、かれは中國の文學の歴史のうえにおいてこのように重要な人物であるばかりではなく、實は書の歴史のうえにおいてもきわめて大切な地位を占めているのである。さらに極端にいえば、かれはその生存した宋代の書道を代表して立つほどの書人であるといつてもおそらくあやまりではないであろう。

蘇東坡の書の現存するものは少くない。それにはどんな種類のものがあるかといえば、眞蹟のものと、石刻のものと法帖に收められたとのとに分つことができる。眞蹟のものでは何といつても、かれが元豐五年（一〇八二）四十七歳

のころにかいたと思われる「黄州寒食詩卷」が第一であろう。も一つは、大阪市立美術館の阿部氏爽籟館のコレクションにある、かれの元祐八年（一〇九三）五十八歳のときにかいた「李太白仙詩卷」がこれに次ぐであろう。いずれも行草の體でかかれた詩卷で、實にみごとなできである。これ以外にも眞蹟のものがあり、また寫眞版などずいぶんいろいろと出ているが、なかには疑わしいものもかなりあつて、眞蹟であればよいというわけにはゆかない。わたくしの見たもののなかでは、しいていえばかれが元祐六年（一〇九一）五十六歳のころにかいた「龍公神帖」などがよいものに屬するであろう。石刻では元祐六年に刻された「宸奎閣碑」が第一であろう。これは宋代にわが國に舶載された拓本が京都の禪刹東福寺に傳來していたもので、今は御物になつている。石刻の東坡の書としてはこれほど確かなものはなく、書も大きい堂々とした楷書で、かの唐の顔眞卿にもおとらぬ氣魄のあふれたものである。このたぐいのものにはなおこのほかに「表忠觀碑」や「豐樂亭記」などがあるがいずれも及ばない。法帖に收められているものでは、南宋のときに東坡の眞蹟ばかりを集めて刻した「西樓帖」がもつとも確かで、またもつとも書もすぐれている。これはすべて十卷あり、かれの三十歳ごろのものから、元豐、元祐年間かれの四五十歳ごろまでの書が豐富に收められている。その書體にも楷行草それぞれが備わつているし、ときには晉の王羲之の書を臨書したというめずらしいものまでもあつて、東坡の書を研究するにはもつとも材料がゆたかでまた變化がある。內容も詩文の稿本や尺牘のたぐいが大部分を占めていて、かれの筆蹟の生々しい痕をよくそのままにとどめている。從つて書ばかりではなく文學のうえからもなかなか貴重な資料となるものである。

かれの文學作品はその文集である東坡集に收められているのを見るとおびただしい數にのぼつている。かれは行雲流水などと言われているように、何でも思うがままに心のゆくがままに筆をとつて書きのこしたのであるから、その分量も多く、內容もゆたかで、趣味もきわめて多方面にわたつている。そういうわけで書の方面においても、とくに著述というほどのものはないが、書を鑑賞したときのそのままの感想の記錄であるところの題跋がかなり多く傳えら

れている。これは「東坡題跋」として他の方面のことをかいた題跋とともに一部にまとめられた本ができている。書の鑑賞の記錄を題跋という文學形式であらわすようになるのも、およそ東坡およびその師であつた歐陽脩あたりから一般に行われるようになつたもので、ちようど文學における詩話のような立場にあるものである。つまり、書の鑑賞の面においてもかれは新しい分野をひらいていた人であると言つてよかろう。

かれが師としてつかえたのは、これも政治家として、また文學、歴史、金石などの多方面にわたる學者として知られた歐陽脩である。蘇東坡の書に對する考へもこの歐陽脩から得ているものが相當多いように思われる。それについてすこし觀察してみると、歐陽脩のことばに、

「書法が中絶してからもう五十年になろうとする。近ごろになつてようやく書の貴いことがわかつてきたが、前賢の跡をたずねてみても、これとおもう人は三四人もない。古の人はみな書をよくしたが、けつきよくただ人物のすぐれた人だけが遠く傳わつているようである。が、後世の人々はこのことを推しはからないで、ただ書ばかりつとめて、すぎし日に書に上手であつた人も、紙墨とともに棄てられてゆくものが數えきれないほどあることに氣がつかないのである」という。

東坡もまた歐陽脩の書を論じて、

「歐陽公の書は筆勢が險勁で字體が新麗であり、自ら一家を成している。しかし、公の墨跡が世間の人々に重んぜられるのは、筆畫の工妙さを待つてはじめてそうなるのではない」といい、また、「歐陽文忠の書は人々が模範とするところのもので、あたかもその人柄を見るかのような書である。かりに上手でなかつたとしても、その書はやはり尊重されたにちがいない。ましてよく研究を積んで敏妙な書をかき自ら一家を成されたからには、尊重されることは言うまでもないことである」という。

東坡はまた、初唐の書家として名高い褚遂良の書を論じた一節に、「古の書を論じた人は兼ねてその人の平生を論

じたものである。もしその人物がよくなければ、いかに上手でも貴ばないのである」という。以上のとおり、すべて先ず人物が立派であることを書の第一の條件としている。

歐陽脩は書を學ぶ工拙について、「いつも字を書くたびに、あまりよく書けないのが氣になるが、見る人はときには取りえがあると言つてくれることもある。また、はじめは自分で氣に入らなくても、幾日かたつてからも一度よく見ると、何だかすこし好ましいもののように思うこともある。しかし、これは、はじめは自分のこころをよせて、つれづれのなぐさみにしようと思つたのであつて、その上手下手などを比べるつもりは何もなかつたのであるが、こんなことにくよくよしたがために、結局これでまた苦勞が一つふえたわけである。人のこころというものは、どうも好いもの、すぐれたものに捕われるのではあるまいか」といい、「書を學ぶには自ら一家の體をなさなければならない。他人を模倣するのを奴書という」といつている。これに對して東坡もまた「書ははじめから上手に書こうと思わないのがよいのである」といい、「わたくしの書はあまり上手ではないけれども、自分で創意を出し、古人のまねごとをしていない。これが自分の痛快に思つていることである」といつている。これらのことばは、歐陽脩と蘇東坡とがいずれも書についてほぼおなじ考へかたをしていたことをよく示している。要するに書はただ手さきの器用さで上手にかいたり、古人の書をそつくりそのままうつしたりすることはしないで、ほんとうの自分の人間性をうちだすべきものであるという說であると見てよいであろう。

かれはよく書を人間の身體にたとえている。「書にはかならず、神、氣、骨、肉、血の五つの要素がなければならない。この一つを欠いても書にならないという。このことばは前にのべた人間性の發露のちようど裏付けをなす說明になるものである。實際、かれの書を見ると、どこかにあたたかい血が流れて、そのなかに魂のひそめられた人間の肉體を見るような感じがする。こころみに寒食詩卷や西樓帖のなかの詩稿を見ると、かれのあたたかい息吹がまのあたりにせまつてくるかと思われるほどである。

しかし、ただ人間の肉體というだけでなく、そのあいだにおのずから德性が備わつていなければならないことは、前說に照してもあきらかである。かれのことばに「人の容貌には好醜があつて君子と小人は隱そうとしても隱すことはできない。言葉には能辯と訥辯とがあつて君子と小人の氣風は欺くことができない。これと同じく書にも工拙があつて君子と小人の心はごまかすことはできない」という、書は人そのものであり、書を見ればその人がらがよくわかる。よい書というものはよい人でなければ書けないという。

こういうところから、かれの好んだのはやはり人格のすぐれた人の書であつた。歐陽脩のことばに、「顏眞卿の書いたものならば、よくないものでも後世見る人はかならず珍重する。楊凝式（五代の書家）は直言をもつてその父を諫めた。その氣節は艱危のうちにあらわれており、李建中（宋初の人）は淸愼溫雅な人物であり、かれの書を愛する人は、兼ねてその人となりをも取るのである。その實質があつてこそ久しく殘るのではあるまいか。むかしからの賢哲がだれでもかならず能書というのではないが、ただ賢者だけが殘ることができるのであつて、そのほかの人たちは、あとかたもなく亡んでもう二度と見ることはできないのである」という。この說はこのまま東坡にひきつがれている。東坡も顏眞卿の書について、「顏魯公の書は雄秀獨出し、誰一人およぶものはなく、古い書法を一變したものである。これはたとえてみれば杜甫の詩のようなもので、格力天縱し、大いに漢魏晉宋以來の風流がある。のちの作者はほとんどまねができない」といい、柳公權についても、「柳少師の書は本來顏眞卿から出たのであるが、よく新意を出した。一字百金といわれるのもいつわりではない。かれが、心正しければ筆正し、といつたのは、ひとりいましめのことばかりではなく、道理のうえからももとよりこのとおりである」といつている。これも柳の書にはその心がそのままあらわれているところに新鮮さをみとめたのであろう。東坡は唐宋以來の書を論じて次のようにいつている。

「顏（眞卿）と柳（公權）とがなくなつてから、筆法はおとろえた。そのうえ、唐末の喪亂のために人物はほとん

ど凋落し絶滅した。五代になると文采風流は地を拂つて盡きた。そのあいだにあつてただひとり楊凝式は筆跡が雄傑で、二王（晉の王羲之と王獻之）および顔、柳の餘風があつた。これこそ、書における豪傑は時勢がわるいからといつて埋沒してしまうということはないというものであろう。宋代のはじめには、李建中が能書と稱せられたけれども、格韻が卑弱であり、依然として唐宋以來の衰陋の氣があつた。このほかに特にぬきんでて前人に肩を並べるほどの人は見たことがない。ただひとり蔡襄（君謨）の書は、天資がすでに高く、學問もふかく積み、心手相應じ、變態きわまりなきに至つては、ついに本朝（宋代）第一である」という。唐末から宋代にかけて書がおとろえたのは立派な人物がなくなつたためであり、宋代においてただひとり蔡襄を取つたのは、かれが書において絶妙であつたばかりではなく、その人物においても傑出していたからである。

かれ自身の書においても同樣であつて、かれの書はかれの人間性がそのままあらわれているところに大きな價値をもつている。かれの書を見ると、行雲流水の自然さのなかに豪放磊落な性格がそのままにあらわれている、そのなかにはかれの一生を貫徹した高い精神が、忠誠なまごころとあたたかい慈悲の情をこめて祕められているのを感ぜずにはいられない。かれの書を平生多くの人々が爭つて求めたというのも、かれの天才的な文學の才能とともにその人物のすぐれていたことによるものであつて、人々はかれの書を通してその人を敬慕したのであろうと思われる。かれが晩年、邊鄙な海南島に流謫されて、一旦歸還を許されたときでさえも、その歸途の道中においてかれの簡札を求めるものが群をなしていたといわれるほどであつたことは、ただ單にかれの書がよいとか詩文が上手であるというだけではなくて、かれの人間的な德行の力が書に備わつていたからであると思われる。のちに、明時代になると、文人のなかに東坡の書を愛する人が多くあらわれるが、それらの人々も、東坡の人物や文學作品を愛するがゆえにその書を愛したのであつて、ただ書の工拙だけで東坡をとりあげているのでは決してない。

かれの書をもつともよく理解したのは、かれの中年以後、かれと師弟の交りを結んだ黄庭堅（山谷）である。黄山

谷は多くは詩人として知られているが、書においても東坡と相ならんでもつとも著名であり、よく修練して東坡にもおとらないよい書をかいている。その書に對する見識もすこぶる高く、理論的な方面では東坡よりも深く掘り下げている。しかし、かれの書も要するに東坡の人物の偉大さに傾倒したところに出發點がある。從つて東坡を論じた題跋もかなり多くのこされている。そのことばを一二拾つてみると、

「東坡道人はわかいときに蘭亭を學んだ。だからその書は姿媚なところは徐浩に似ている。酒に醉うてよい氣分になつたときには、技巧の上手下手を忘れて、字はとくに瘦勁になり、柳公權に似ていた。中年には顏眞卿と楊凝式を學び、そのよくできたものは李邕に劣らなかつた。筆法が圓で圭角をあらわさず風韻のすぐれたものは、天下第一の文章の妙味のうえに日月を貫く忠義の氣象を加えたとなると、本朝（宋代）の書の上手なもののなかの第一に推すべきである」という。このことばは東坡の書を批評したもののなかでももつとも要をえたまた正しいものと思われる。

黃山谷が東坡の書を稱賛するのは一つにはその學問人物の偉大さにあつた。山谷は、「東坡の書は學問文章の氣が鬱々芊々として筆墨の間に發している。これが凡人にはまねのできないところである」という。

顏眞卿については、山谷は、「わたくしは東坡といつしよに顏平原（眞卿）を學んだ。しかし、わたくしは手が拙く、終に近ずくことができなかつた、」といつている。これに對して東坡はよほどよく顏を寫したとみえて、『東坡先生はいつもみずから顏眞卿に比べられていた。わたくしの考えでは、長を絕ち短を補えば兩公はいずれも一代の偉人である。行草正書の風氣となると、いずれもほぼ似ている。かつてわたくしのために臨書してくれた顏の「蔡明遠帖」などは實によくできていた。また「祭兄滁州刺史文」および「祭姪季明文」、「論魚容坐次書」（爭坐位帖）「乞脯帖」（鹿脯帖か）、「天氣殊未佳帖」などみな眞に迫つていた』という。東坡が顏眞卿を崇拜し、またその書を臨した事情はこれによつてよくわかる。

東坡は顏眞卿に學んだが、山谷は顏眞卿を晉人に結びつけて、東坡を晉人の血脈を承けついだものとした。山谷は

このように言つている。「右軍父子（王羲之、獻之）の翰墨中の逸氣は歐、虞、褚、薛（初唐の四家）によつて破壞され、徐浩、沈傳師になつて地を拂つた。ただ、顏眞卿と楊凝式にはまだそのおもかげがある。近ごろでは蘇東坡だけが顏、楊の氣骨に近ずいている、」という。晉人の書には俗塵に汚れないところのきわめて高い自然の逸氣がある。そこにはいささかの俗氣もない。唐の楷書はいたずらに技巧にとらわれて、晉人のもつていた自然の逸氣が失われてしまつた。その弊害は中唐のころの徐浩と晩唐の沈傳師になつてきわまつた。ところが顏眞卿と楊凝式の二人においては晉人の超逸さを承けついだ。宋代で顏、楊の精神を體得したものは東坡だけであるというのである。顏眞卿と楊凝式の書を貴んだことについてはすでに歐陽脩のことばにもあるとおりで、東坡はそれを承けついでいるわけであるが、山谷はさらにそれを晉人の風度に結びつけ、超逸絶塵、いささかの俗氣もない美しさを見出したところに、その東坡の書に對する理解力の深さがうかがわれる。

中國においては書の時代性を論ずるに、その時代の中心點を晉と唐と宋の三つの時代に置いて論ずる。それはこの三つの時代において書がもつとも發達したと見るからであつて、そのもつとも發達した三つの頂點をとりあげて論ずるわけである。山谷が論じているのも、要するにこの三つの時代の性格の相異とその相關性に歸着する。そこでこの各時代の性格がよくわかれば、東坡の書の歷史上の位置もおのずから明らかになるであろう。

この三つの時代の書の性格を對照的に論じたのは、明の董其昌がもつとも早いであろう。かれのことばに、「晉人は韻を取り、唐人は法を取り、宋人は意を取る」といつている。これについで清初の馮班も、「晉人は理を用い、唐人は法を用い、宋人は意を用いた」とし、乾隆年間の人、梁巘は、「晉は韻を尙び、唐は法を尙び、宋は意を尙び、元明は態を尙んだ」とし、そののち周星蓮も、「晉人は韻を取り、唐人は法を取り、宋人は意を取つた」とし、それぞれみな前人の說をおなじように承けついでいる。

これらの説を要約すれば、晉人の書は自然の原理に從つてかかれたもので、その風韻においてすぐれることを尚ぶのである。その風神はあたかも神仙を見るかのごとくである。たとえば王羲之、王獻之がそれである。唐人の書は文字の技巧をこらしてかかれたもので、書法のすぐれていることを學ぶのである。その風神はあたかも聖人を見るかのごとくである。たとえば歐陽詢、虞世南がそれである。宋人の書は人間の精神を生かしてかかれたもので、その情意においてすぐれることを尚ぶのである。その風神はあたかも豪傑を見るかのごとくである。たとえば蘇東坡、黄山谷がそれである。

この三つの時代の特性の相關性について、まず馮班の説をみると、「晉人は自然の原理に從つて字をかいた。だから心の欲するところに從つて矩をこえずといつたような神妙な境地に達した。晉人の原理にもとずいて法が立てられ、その法が安定してくると一定の規格ができるようになつた。唐人の書が晉人に及ばないのはこの一定の規格に陷つたためである。宋人は意によつて書をかいた。その意は晉人を學ぶことにあつたのである」といい、「晉人は原理に循つてそのうちに法が生じた。唐人は法を用いてそのうちに意が出來てきた。宋人は意を用いて古法がつぶさにそなわつた」という。

唐の書法は晉の原理から生じてきたものであり、宋人は晉を學んだのである、ということを言つているのである。しかし、宋人が晉を學んで成功したかどうかについては、「晉人は理を盡し、唐人は法を盡した。宋人は多く新しい意を用いて、自分では唐人よりまさつていると考えているが、實は及ばないのである」といい、かならずしも宋人を唐人よりすぐれているとはしていない。この點については董其昌もおなじであつて、「唐人が法を取り、宋人が意を取つたとすれば、意の方が法の方よりすぐれているのではないかという疑問に對して、宋人はその自分の意をもつて書をかいているだけのことで、古人の意があるわけではない」といつている。しかし、ここで結局もつとも問題となるのは、宋人がはたして晉を學んだかどうかという點に歸着する。それが成功したかどうかはしばらく別の問題で

ある。

晉を代表するものは二王であり、唐を代表するものは歐虞であるとするのが以上の理論の目標となつているのであるが、宋人が唐に學んだのは、東坡、山谷の場合においては、唐人は唐人でも、とくに異色の顏眞卿であつて初唐の楷書は規矩に捕われたものとして排除している。そこで顏眞卿が晉から出たものであるか、または反對に晉をしりぞけて新しい世界をつくりだしたものであるかということによつて、東坡と山谷が晉人とのつながりをどのようにもつていたかということが解つてくるわけである。今日の書道史の見方としては、顏眞卿は二王に對して反抗的に新しい書法を打ち立てたものでその源流はどちらかといえば北碑に屬するものであると考えられている。歴史のうえではこの見方はもちろん正しいとしなければならないであろうが、今ここで東坡と山谷の本來の見方というものがかれらの書の原理となつていると思われる以上は、その立場においてこそ北宋の生んだこの偉大な東坡を理解する必要があると感ぜられる。

東坡のことばに「わたくしはかつて書を論じてこう考えたことがある。鍾（繇）王（羲之）の書跡は蕭散簡遠で、その妙味は筆畫の外にある。唐の顏（眞卿）柳（公權）になつて、古今の筆法を集めてことごとくこれを發揚し、書の變化を極め、天下は翕然（きょうぜん）としてかれを宗師とした、が鍾王の法はますます衰微した」という。

東坡はわかいときには王羲之の蘭亭序をよく學んでその風韻をえたといわれる。西樓帖のなかにはその實例の存しているものが見られる。また、西樓帖には王羲之の草書の尺牘を臨書したものがあるところから考えると、かれは晉人の書を直接に學んでいたことは事實である。しかし、かれは古人の書をそのまま模倣することは書の奴隷になることであるとしてしりぞけたことは自分でも言つているとおりである。かれが晉人を學んだとしてもそれは晉人の精髓を取つて自家藥籠中のものとしたのであつて、いたずらに古人の糟粕を甜めるようなことはしなかつたと思う。このことばを讀んでみても、かれが晉人の書の價値を高く評價していることがわかるが、晉人に取つたのはやはり筆畫の

外にある意趣である。顔柳もまた晉人の遺意を得たことはみとめているがそれが實際においては鍾王を再生するほどのものではなかつたから、衰微したといつてるのであると思う。

山谷の見方は東坡よりさらに極端である。そのことばに、「わたくしはこう論じたことがある。二王以來、書藝の超逸絶塵なのはただ顔魯公（眞卿）と楊少師（凝式）だけである。兩者のあいだは數百年をへだてているが、親しく面接しているかのごとくである」といい、また、「顔魯公の書は自ら一家を成してはいるけれども、曲折これを求めるとみな右軍父子（二王）の筆法に合している。書家は多くこのところに氣がつかない。だから徐浩、沈傳師を尊尚している」といい、「わたくしはかつて顔魯公の書を評して、獨り右軍父子の超逸絶塵のところを體得しているといつた。書家はかならずしもこうは考へないが、ただ翰林蘇公（東坡）だけは許容してくれる。」といい、また顔魯公のある法帖に題して、「魯公のこの帖を觀ると、奇偉秀拔で、まことに魏晉隋唐以來の風流氣骨がある。ひるがえつて歐虞褚薛徐沈（歐陽詢、虞世南、褚遂良、薛稷、徐浩、沈傳師）などを視ると、みな法度のために束縛されている。魯公が蕭然として繩墨の外に出て卒にこれと合しているのにはとうてい及ばない。二王からのち書法の極致を集成することができたのは、ただ張長史（旭）と魯公二人だけである。そののち楊少師（凝式）がいくらか髣髴することができたが、ただし規矩にとぼしく、また楷書をよくしないのが難點である。しかしこれもまた自ら天下後世に冠絶するものである。」という。

山谷は、顔眞卿および唐の中期以後にでた革新的な書家である張旭や楊凝式などをとりあげて、晉人の超逸絶塵の逸氣を得ているとし、顔眞卿についてはその筆法が二王に合しているとまで言つている。顔の書風が革新的であるのはむしろ初唐の楷書に對してであつて、晉人とは深い關係をもつて直結するとするのである。この說については當時の書家たちはかならずしも認めていなかつたようであるが、東坡はこれを許容していた。從つて東坡の顔に對する見方も山谷ほど徹底してはいなかつたかもしれないが、大體のところは晉人と結びつけてその風神を得たものと考えて

いたと思われる。

山谷の見た東坡は、あたかも神仙中の人のごとくであり、詩人ならば李白に例えられるといつてただならぬ敬仰をささげているだけに、東坡の輪廓はもつともうつくしく理想的に人格化されている。その評語のなかには自らの心の修練の中から生れでたものがあることが多分に感じとられるが、何といつても直接師事した人物を描いた記録であり、東坡を理解するにはやはりもつともよい批評のことばというべきであろう。